

知的障害者である生徒に対する教育を行う特別支援学校中学部保健体育科の 武道における少林寺拳法指導プログラムの開発 (2) —聴覚障害のある生徒への実践を通して—

Development of the *Shorinji Kempo* Martial Arts Teaching Program
Conducted in the Lower Secondary Department's Health and
Physical Education Class of a Special Needs School That
Educates Students with Intellectual Disabilities (2):
Case Study for the Student with Hearing Impairment

天海 丈久*・神山 博**・根深 諒太***・工藤 知哉****
保村 崇有***・加福 千佳子****・秋元 宏介*****・衛藤 裕司*****
Takehisa AMAGAI, Hiroshi KAMIYAMA, Ryota NEBUKA, Tomoya KUDO
Takasumi YASUMURA, Chikako KAFUKU, Kohsuke AKIMOTO, Hiroshi ETO

要旨

平成29 (2017) 年に告示された知的障害者である生徒に対する教育を行う特別支援学校中学部保健体育科に武道が新設され、知的障害教育においても武道の指導が実施されることとなった。しかし、特別支援学校の知的障害教育においては武道の指導の蓄積がほとんどなく、また運動種目の決定に当たっては、生徒の障害の状況や発達の段階を十分考慮し、検討を行う必要がある。そこで知的障害者である生徒に対する教育を行う特別支援学校中学部保健体育科の武道の指導における少林寺拳法1・2段階の評価規準および指導プログラムを、授業研究を通して開発することを目的に、本研究を3年計画で実施した。本論は研究2年次の結果を報告するものであり、前年度の検討課題 (天海ら, 2023) である対人的技能 (法形, 技) の選択方法, ICTの活用方法, 評価方法を中心に検討し、中学部第2学年の少林寺拳法指導プログラムを提案した。

キーワード: 少林寺拳法, 特別支援学校 (知的障害) 中学部保健体育科, 武道, 聴覚障害, UDトーク

I. はじめに

平成29 (2017) 年に告示された特別支援学校中学部学習指導要領 (文部科学省, 2018) で、知的障害者である生徒に対する教育を行う特別支援学校の保健体育科 (以下、「保健体育科 (知的障害)」とする。) の内容に武道が新設された。保健体育科 (知的障害) ではこれまで武道が示されていなかったことから、今後指導の蓄積を積み重ねていく必要がある。

特別支援学校における武道の運動種目の選択に当たっては、生徒の障害の状態や発達の状況、安全面、環境面、金銭面などを考慮する必要があるが、少林寺拳法は、既存の施設で実施できること、新たな備品が必要ないこと、安全に実施できること、自信と勇気と行動力を習得し、思いやりと正義感を養うことを目標と

* 弘前大学教育学部 Department of Special Needs Education Course, Faculty of Education, Hirosaki University
** 青森公立大学 Aomori Public University
*** 青森県立弘前聾学校 Aomori Prefectural School for the Deaf, Hirosaki
**** 青森県立青森若葉養護学校 Aomori Prefectural School for Special Needs Education, Aomori Wakaba
***** 弘前大学教育学部附属特別支援学校 School for Special Needs Education Attached to the Faculty of Education, Hirosaki University
***** 一般財団法人少林寺拳法連盟 Japanese Shorinji Kempo Federation
***** 大分大学教育学部 Faculty of Education, Oita University

していることから、特別支援学校において採択しやすいと考えられる。そこで、保健体育科（知的障害）の武道の指導における少林寺拳法1・2段階の評価規準および指導プログラムを、授業研究を通して開発することを目的とし、本研究を3年計画で実施した。

研究1年次（天海・保村・工藤・根深・加福・池田・秋元，2023）は、少林寺拳法1・2段階の評価規準および中学部第1学年の指導プログラムを作成し、A特別支援学校（聴覚障害）に在籍する中学部第1学年の生徒を対象に5回の授業を実施し、授業研究を通して評価規準および指導プログラムの評価を行った。その結果、授業に携わった教員からは、作成した中学部第1学年の少林寺拳法1・2段階の評価規準および指導プログラムは妥当であったとの見解が示された。また、新しいことに挑戦しようとするのが少なかった対象生徒が、普段の学校生活の中でも新しいことに挑戦しようとする変容がみられるようになったことから、自信や勇気、行動力がついたことがうかがわれ、少林寺拳法の授業は対象生徒にとって有効であったと考えられた。一方、評価が全て「達成」もしくは「十分達成」であったこと、聴覚障害への配慮としてデジタルワイヤレス補聴援助システムRoger（PHONAK社製，2016）のワイヤレスマイクロホン（送信機）「Roger Touchscreen Mic」を首から吊り下げて使用したが、道衣のこすれる音を拾ってしまったり、防具を着用する際に支障となったりしたことから改善が必要であるという課題も残された。

そこで本論では、前年度の課題解決とより良い指導法の探求を目指し、対人的技能（基本となる技，法形）の選択方法，ICTの活用方法，評価方法を主な目的として、中学部第2学年の少林寺拳法指導プログラムを作成し実践研究を行った研究2年次の結果について報告する。

II. 方法

A特別支援学校（聴覚障害）において、聴覚障害と知的障害を併せ有する中学部第2学年の生徒1名を対象（研究1年次から継続指導）とし、体育科教員2名，担任1名とともに全体指導を筆頭著者が行い、学校側と相談の上，202X年10月～12月に計5回の指導（1単位時間50分）を実施した。対象生徒は両耳に補聴器を装着しており、聴覚活用の状況は良好であり、補聴器やRoger補聴援助システムを通して生活環境音に反応したり日常会話を聞き取っておおむね理解したりすることができるが、言語発達に遅れがあり、会話や授業の内容等を理解するために手話や文字などを補助的に使用していた。また保健体育科（知的障害）では2段階の目標および内容を学習していた。なお筆頭著者は元特別支援学校教員で、2009年に専門学校禅林学園武道専門コース研究科を修了しており、少林寺拳法の資格は、正拳士（金剛禅の修行法に基づく修養度と教えの実践度を表す「法階」）、四段（少林寺拳法の教えと技法の修得度を示す「武階」）、少導師（金剛禅の修行法に基づく修養度と教えの実践度を表す「僧階」）であった。

1. 対人的技能（法形，技）の選択方法

少林寺拳法の技能には、突きや蹴りなどを用いる技の系統である「剛法」と、抜技、逆技などの系統である「柔法」がある。研究1年次（第1学年時）の指導では、剛法は入門後すぐに修練する科目（6級科目）であることから、「内受突（裏）」（攻者の上段逆突の攻撃に対し、守者は後者の裏に入り内受をし、続いて中段逆突をする）を取り上げた。また柔法は、内受突（裏）より上級で修練する科目（2級科目）であるが、力に頼らずとも捕まれた手を抜くことが体感しやすい技であることから、「上膊抜（片手）」（攻者が上膊を強く掴み押してきたときに、守者は手法を行い、攻者の正面に入って自分の頬へ当たるくらい肘をあげ、肩を後ろへ引くようにして抜く）を取り上げた。これを受け、研究2年次（第2学年時）の指導では、剛法は「上受蹴（裏）」（攻者の上段逆突に対し、守者は上受，中段逆蹴をする）、柔法は「上膊捕（片手）」（攻者が上膊を強く掴み押してきたときに、守者は手法を行い、掴んできた手首を上膊に挟んで捕る）を取り上げた。理由は、「上受蹴」は守者の体捌きが「内受突」とほぼ同じであること、上受と蹴りを学習できること、「上膊捕」は「上膊抜」の関連技であること、対象生徒は保健体育科2段階の内容を学習しており、逆技にも強い興味・関心があったからである。なお「上受蹴」では、本来の攻者の攻撃は手刀打（五指を開いて強く張り小指側の部分で打つ）であるが、「内受突」と同じ上段逆突で実施した（日本武道協議会・一般財団法人少林寺拳法連盟，2017）。また、コロナ禍で授業が延期になった回もあったため、事前に対人的技能の動画を学校に渡し、時間のあるときに視聴してもらうようにした。

実施したプログラムは、前年の復習、講話として少林寺拳法の特徴（拳禅一如，力愛不二，守主攻従，不殺活人，剛柔一体，組手主体），礼法・作法・基本動作，上受蹴，上膊捕，演武練習，演武発表会であった（表1-1，表1-2，表1-3，表1-4，表1-5に示した）。講話は資料を作成して配布し，研究1年次と同様に文字はUDデジタル教科書体で作成，漢字にはルビがふられた。

表1-1 少林寺拳法1時間目の学習指導略案

本 時 案（指導計画5時間の1時間目）			
本時のねらい		1 伝統的な文化（少林寺拳法）に関心をもち，正しい礼法・作法を身に付ける。 2 基本動作を身に付ける。	
	学習活動	指導上の留意点	評 価
導 入	1 集合・点呼，挨拶をし，本時の活動内容とねらいを確認する。 2 健康観察・準備運動をする。 3 黙想をする。	○授業全体を通して，手話を併用して話す。 ○生徒全員が挨拶できているか確認し，できていなければやり直すなど，きちんとした挨拶が習慣になるように指導する。 ○音声認識アプリを使用して，説明に文字を補う。 ○本時の活動内容を箇条書きにして説明する。 ○目標を明確にするため，本時のねらいを説明する（各種構え，運歩法，振身，振子突，逆突，内受突，上膊抜）。 ○自他の健康・安全に配慮する習慣を養うために爪，練習場所などの安全確認を指示する。 ○作法に従って目を閉じて黙想し，武道の練習にふさわしい気持ちにする。	
展 開	4 少林寺拳法について，昨年度の復習をする。 5 礼法・作法，各種構え，運歩法，振身，振子突，逆突，内受突，上膊抜の復習をする。 ○結手立，合掌礼 ○着座・安座の作法 ○開足中段構・左前中段構 ○運歩法・振身 ○振子突，逆突 ○内受突 ○上膊抜	○重要な語句や動作の名称について，カードを活用し提示する。 ○「少林寺拳法とは」「人づくりの道（行）」「武」としての少林寺拳法」「本当のつよさ」とは」について，昨年度の復習をする。 ○礼法・作法における，手の位置，目線，姿勢，動作について復習する。 ○振身，運歩法を併用し，確実に相手の攻撃をかわす意識をもつように指示する。 ○肩，腰の回転を使った突きの復習をする。 ○正確な突きをするために，足先の方向に気を付けるよう指示する。 ○攻撃をかわしての内受，中段への反撃，残心について復習する。 ○抜く腕の肘を曲げ，肩を中心に大きく回し，力を入れなくても抜けることを復習する。 ○互いに助言し合ったり，動きを確認したりする場面を設定する。	○少林寺拳法について昨年度の学習内容を理解していたか。 （自己評価シート，生徒の様子） 【知識】 ○基本動作の意味を理解し，正しい基本動作ができたか。 （自己評価シート，生徒の様子） 【技能】 ○内受突ができたか。 （自己評価シート，生徒の様子） 【技能】 ○上膊抜ができたか。 （自己評価シート，生徒の様子） 【技能】 ○内受突，上膊抜に積極的に取り組んでいたか。 ○正しい姿勢で合掌礼ができたか。 ○気合いが出せたか。 （自己評価シート，生徒の様子） 【主体的に学習に取り組む態度】
ま と め	6 整理運動をし，健康観察をする。 7 本時を振り返り，自己評価シートにまとめる。 8 次時の予告を聞き挨拶をする。	○よく使った部位を中心に整理運動をし，疲労を残さないようにする。健康観察をする。 ○音声認識アプリを使用して，説明に文字を補う。 ○学習の定着を図るため，本時のねらいと，学習した内容を再確認する。 ○次時の予告をし，学習意欲の継続を図る。 ○生徒全員が挨拶できているか確認し，できていなければやり直すなど，きちんとした挨拶が習慣になるように指導する。	

表 1-2 少林寺拳法 2 時間目の学習指導略案

本 時 案 (指導計画 5 時間の 2 時間目)			
本時のねらい		1 武道の意味について考え、正しい武道の在り方を理解する。 2 基本となる対人技能 (上受蹴 (裏)) を身に付ける。	
	学習活動	指導上の留意点	評 価
導 入	1 集合・点呼、挨拶をし、本時の活動内容とねらいを確認する。 2 健康観察・準備運動をする。 3 黙想をする。	○授業全体を通して、手話を併用して話す。 ○生徒全員が挨拶できているか確認し、できていなければやり直すなど、きちんとした挨拶が習慣になるように指導する。 ○音声認識アプリを使用して、説明に文字を補う。 ○本時の活動内容を箇条書きにして説明する。 ○目標を明確にするため、本時のねらいを説明する (上受蹴)。 ○自他の健康・安全に配慮する習慣を養うために、爪、練習場所などの安全確認を指示する。 ○作法に従って目を閉じて黙想し、武道の練習にふさわしい気持ちにする。	
展 開	4 拳禅一如、力愛不二について説明を聞く。 5 上受蹴の練習をする。 ○全員で攻撃をする側の動きを練習する。 ○全員で防御し反撃する側の動きを練習する。 ○二人組で上受蹴の練習をする (対人的技能)。 ○間合について学習する。 ○攻撃と防御に分かれ、相手の動きに応じた攻防の練習をする。 ○練習相手を替えて、合掌礼・練習・合掌礼を繰り返す。	○重要な語句や動作の名称について、カードを活用し提示する。 ○少林寺拳法は、身体と心の両方を修練すること、力と愛の調和を目指すことについて説明し、理解を促す。 ○構え、突きを復習し定着を図ると共に、上受蹴についての学習意欲を高める。 ○技のイメージがつかめるように上受蹴の模範を見せる (攻者は上段逆突、守者は顔をかわして上受をし、中段蹴)。 ○動作を覚えやすくするために、動きに号令を付けて練習するよう指示する。 ○正確な突きができるように、突いた状態で静止させ、突く位置の確認をする。 ○基本間合と遠間を確認し、安全のため互いの攻撃が届かない距離から練習するように指示する。 ○攻撃をかわす意識を常にもって練習するように指示する。 ○顔をかわすことと上受の両方で、確実に相手の攻撃をかわすことを指示する。 ○反撃が中段を蹴っているか観察し、正確に蹴れていない場合は指導する (反撃は20cm手前で止める)。 ○残心の意味を説明し、練習中に気を抜かない態度を養う。 ○相手を見ながら、正しい姿勢で心を込めた合掌礼を促す。 ○練習相手を替え、誰とでも教え合える習慣を身に付ける。	○拳禅一如と力愛不二の意味が理解できたか。 (自己評価シート、生徒の様子) 【知識】 ○顔をかわして上受ができたか。 ○中段へ反撃ができたか。 (自己評価シート、生徒の様子) 【技能】 ○上受蹴に積極的に取り組んでいたか。 ○正しい姿勢で合掌礼ができたか。 (自己評価シート、生徒の様子) 【主体的に学習に取り組む態度】
ま と め	6 整理運動をし、健康観察をする。 7 本時を振り返り、自己評価シートにまとめる。 8 次時の予告を聞き挨拶をする。	○よく使った部位を中心に整理運動をし、疲労を残さないようにする。健康観察をする。 ○音声認識アプリを使用して、説明に文字を補う。 ○学習の定着を図るため、本時のねらいと、学習した内容を再確認する。 ○次時の予告をし、学習意欲の継続を図る。 ○生徒全員が挨拶できているか確認し、できていなければやり直すなど、きちんとした挨拶が習慣になるように指導する。	

表 1-3 少林寺拳法 3 時間目の学習指導略案

本 時 案 (指導計画 5 時間の 3 時間目)			
本時のねらい	1 武道の意味について考え, 正しい武道の在り方を理解する。 2 基本となる対人技能(上膊捕)を身に付ける。 3 相手を思いやる気持ちと協調性を養う。		
	学習活動	指導上の留意点	評 価
導 入	1 集合・点呼, 挨拶をし, 本時の活動内容とねらいを確認する。 2 健康観察・準備運動をする。 3 黙想をする。	○授業全体を通して, 手話を併用して話す。 ○生徒全員が挨拶できているか確認し, できていなければやり直すなど, きちんとした挨拶が習慣になるように指導する。 ○音声認識アプリを使用して, 説明に文字を補う。 ○本時の活動内容を箇条書きにして説明する。 ○目標を明確にするため, 本時のねらいを説明する(上膊捕)。 ○自他の健康・安全に配慮する習慣を養うために爪, 練習場所などの安全確認を指示する。 ○作法に従って目を閉じて黙想し, 武道の練習にふさわしい気持ちにする。	
展 開	4 守主攻従, 不殺活人について説明を聞く。 5 上膊捕を 2 人組で練習をする。 6 2 人組で技のポイントを確認し合いながら練習する。 7 上膊捕を発表する。	○重要な語句や動作の名称について, カードを活用し提示する。 ○少林寺拳法は, 守ってから反撃をすること, 他人を傷つけずに自分と他人を守り生かすことについて説明し, 理解を促す。 ○技のイメージがつかめるように, 上膊捕の模範を見せる。 ○動作を覚えやすくするために, 動きに号令を付けて練習するよう指示する。 ○攻撃する側は, 相手のことを考え, 強く握りすぎたりしないように指示する。 ○防御する側は, つかんできた手首を生かして上膊に挟み, つかみ手の間に遊びをなくし, やや押し返すように捕ることを示す。 ○上記の技のポイントをホワイトボードに示し, 生徒同士が教え合いやすくなる条件を整える。 ○号令を付けずに, 相手の動きや力に応じた抜技の練習をするなど対人的技能の向上を図る。 ○見る態度や発表者への拍手を指示し, 互いに練習の成果を評価し合える雰囲気を作る。	○守主攻従と不殺活人の意味が理解できたか。 (自己評価シート, 生徒の様子) 【知識】 ○技のポイントを理解し, 相手の動きに応じた上膊捕ができたか。 (自己評価シート, 生徒の様子) 【技能】 ○自分や相手の課題を見付け, その解決のための活動を考えたり, 工夫したりしていたか。 (自己評価シート, 生徒の様子) 【思考・判断】 ○友達と考えたり, 工夫したりしたことを伝え合っていたか。 (自己評価シート, 生徒の様子) 【表現】 ○意欲的に教え合い, 相手を思いやりながら互いに協力して練習できたか。 (自己評価シート, 生徒の様子) 【主体的に学習に取り組む態度】
ま と め	8 整理運動をし, 健康観察をする。 9 本時を振り返り, 自己評価シートにまとめる。 10 次時の予告を聞き挨拶をする。	○よく使った部位を中心に整理運動をし, 疲労を残さないようにする。健康観察をする。 ○音声認識アプリを使用して, 説明に文字を補う。 ○学習の定着を図るため, 本時のねらいと, 学習した内容を再確認する。 ○次時の予告をし, 学習意欲の継続を図る。 ○生徒全員が挨拶できているか確認し, できていなければやり直すなど, きちんとした挨拶が習慣になるように指導する。	

表 1-4 少林寺拳法 4 時間目の学習指導略案

本 時 案 (指導計画 5 時間の 4 時間目)			
	本時のねらい	1 少林寺拳法が求める「本当の強さ」を理解する。 2 対人的技能 (内受突, 上膊抜, 上受蹴, 上膊捕) を復習し, 演武の仕方を身に付ける。 3 協力して楽しく運動する態度を養う。	
	学習活動	指導上の留意点	評 価
導 入	1 集合・点呼, 挨拶をし, 本時の活動内容とねらいを確認する。 2 健康観察・準備運動をする。 3 黙想をする。	○授業全体を通して, 手話を併用して話す。 ○生徒全員が挨拶できているか確認し, できていなければやり直すなど, きちんとした挨拶が習慣になるように指導する。 ○音声認識アプリを使用して, 説明に文字を補う。 ○本時の活動内容を箇条書きにして説明する。 ○目標を明確にするため, 本時のねらいを説明する (演武の仕方)。 ○自他の健康・安全に配慮する習慣を養うために爪, 練習場所などの安全確認を指示する。 ○作法に従って目を閉じて黙想し, 武道の練習にふさわしい気持ちにする。	
展 開	4 剛柔一体, 組手主体について説明を聞く。 5 内受突, 上膊抜, 上受蹴, 上膊捕のポイントを確認し練習する (復習)。 6 演武を 2 人組で練習する。 ①合掌礼 ②構え, 内受突, 残心 (攻撃・防御交替) ③構え, 上膊抜, 残心 (攻撃・防御交替) ④構え, 上受蹴, 残心 (攻撃・防御交代) ⑤構え, 上膊捕, 残心 (攻撃・防御交代) ⑥合掌礼 7 2 人組で演武の発表をする。	○重要な語句や動作の名称について, カードを活用し提示する。 ○少林寺拳法は, 剛法と柔法が組み合わされていること, 共に協力して上達を目指すことを説明し, 理解を促す。 ○安全のため, 互いの攻撃が届かない距離から練習するよう指示する。 ○動作を確認し, 演武のポイントである, 気合い, 間合い, 正確さ, 流れが途切れないことなどについて説明する。 ○4 人組で, 見せ合ったり, 教え合ったりできるよう, 演武の流れ, 技のポイントなどをホワイトボードに提示する。 ○反撃は 20cm 手前で止めることを注意する。 ○気迫のこもった演武になるよう, 構えと誘い, 気合い, 残心の大切さを説明する。 ○大きな気合いが出るよう, 和やかな授業の雰囲気を作る。 ○見る態度や発表者への拍手を指示し, 互いに練習の成果を評価し合える雰囲気を作る。	○剛柔一体と組手主体の意味が理解できたか。 (自己評価シート, 生徒の様子) 【知識】 ○自分や相手の課題を見付け, その解決のための活動を考えたり, 工夫したりしていたか。 (自己評価シート, 生徒の様子) 【思考・判断】 ○友達と考えたり, 工夫したりしたことを伝え合っていたか。 (自己評価シート, 生徒の様子) 【表現】 ○意欲的に教え合い, 相手を思いやりながら互いに協力して練習できたか。 (自己評価シート, 生徒の様子) 【主体的に学習に取り組む態度】 ○演武の仕方を理解し, 相手の動きに応じた対人的技能ができたか。 (自己評価シート, 生徒の様子) 【技能】
ま と め	8 整理運動をし, 健康観察をする。 9 本時を振り返り, 自己評価シートにまとめる。 10 次時の予告を聞き挨拶をする。	○よく使った部位を中心に整理運動をし, 疲労を残さないようにする。健康観察をする。 ○音声認識アプリを使用して, 説明に文字を補う。 ○学習の定着を図るため, 本時のねらいと, 学習した内容を再確認する。 ○次時の予告をし, 学習意欲の継続を図る。 ○生徒全員が挨拶できているか確認し, できていなければやり直すなど, きちんとした挨拶が習慣になるように指導する。	

表 1-5 少林寺拳法 5 時間目の学習指導略案

本 時 案 (指導計画 5 時間の 5 時間目)			
本時のねらい	1 対人的技能(内受突, 上膊抜, 上受蹴, 上膊捕)を復習し, 演武の仕方を身に付ける。 2 協力して楽しく運動する態度を養う。		
	学習活動	指導上の留意点	評 価
導 入	1 集合・点呼, 挨拶をし, 本時の活動内容とねらいを確認する。 2 健康観察・準備運動をする。 3 黙想をする。	○授業全体を通して, 手話を併用して話す。 ○生徒全員が挨拶できているか確認し, できていなければやり直すなど, きちんとした挨拶が習慣になるように指導する。 ○音声認識アプリを使用して, 説明に文字を補う。 ○本時の活動内容を箇条書きにして説明する。 ○目標を明確にするため, 本時のねらいを説明する(演武の仕方)。 ○自他の健康・安全に配慮する習慣を養うために爪, 練習場所などの安全確認を指示する。 ○作法に従って目を閉じて黙想し, 武道の練習にふさわしい気持ちにする。	
展 開	4 演武発表会の方法と採点シートの説明を聞く。 5 2人組で, 発表会の作法と組演武の練習をする。 ①合掌礼 ②構え, 内受突, 残心(攻撃・防御交替) ③構え, 上膊抜, 残心(攻撃・防御交替) ④構え, 上受蹴, 残心(攻撃・防御交代) ⑤構え, 上膊捕, 残心(攻撃・防御交代) ⑥合掌礼 6 演武発表会をする。合掌礼→技能→合掌礼の組演武を, 1組ずつ行い全員で評価する。 7 まとめの練習をする。	○重要な語句や動作の名称について, カードを活用し提示する。 ○作法に従って演武発表会ができるよう, 返事の仕方, 組演武の始め方や終わり方などを説明する。 ○組演武構成, 採点のポイント, 採点シートの記入方法などを説明し, 演武発表会への関心を高める。 ○2人組で, 見せ合ったり, 教え合ったりできるよう, 演武の流れ, 技のポイント, 採点のポイントをホワイトボードに提示しておく。 ○気迫のこもった演武になるよう, 構えと誘い, 気合い, 残心の大切さを説明する。 ○見る態度や発表者への拍手を指示し, 互いに練習の成果を評価し合える雰囲気を作る。 ○終わりの合掌礼の後に, 採点シートに記入するよう指示し, 発表者への礼儀, 演武発表会の在り方を考えられるようにする。 ○採点者は演武者に評価をフィードバックし, 良かった点や修正した方が良い点を伝える。 ○ICT機器を使って動画を撮影しておき, 最後に指導者が動画を見ながら講評を行う。 ○評価を受け, 最後にまとめの練習を行う。	○演武の中で対人的技能(内受突, 上膊抜, 上受蹴, 上膊捕)ができたか。(自己評価シート, 生徒の様子) 【技能】 ○発表会の作法, 演武の流れを理解し, 意欲的に発表できたか。(自己評価シート, 生徒の様子) 【主体的に学習に取り組む態度】 ○演武における自分や友達の課題を見付け, その解決のための活動を考えたり, 工夫したりしていたか。(自己評価シート, 生徒の様子) 【思考・判断】 ○友達と考えたり, 工夫したりしたことを伝え合っていたか。(自己評価シート, 生徒の様子) 【表現】
ま と め	8 整理運動をし, 健康観察をする。 9 本時を振り返り, 自己評価シートにまとめる。 10 来年度の予告を聞き, 挨拶をする。	○よく使った部位を中心に整理運動をし, 疲労を残さないようにする。健康観察をする。 ○音声認識アプリを使用して, 説明に文字を補う。 ○学習の定着を図るため, 本時のねらいと, 学習した内容を再確認する。 ○来年度の予告をし, 学習意欲の継続を図る。 ○生徒全員が挨拶できているか確認し, できていなければやり直すなど, きちんとした挨拶が習慣になるように指導する。	

2. ICTの活用方法

研究1年次はデジタルワイヤレス補聴援助システム Roger (PHONAK社製, 2016) の送信機「Roger Touchscreen Mic」を指導者の首から吊り下げて使用したが, 道衣のこすれる音を拾ってしまったり, 防具

を着用する際に支障となったりすることから改善が必要と考えられた。そこで研究2年次は、より小型軽量の「Roger On」(PHONAK社製, 2022)を道衣の襟に装着して使用した。また研究1年次同様、コミュニケーション支援・会話の見える化アプリ「UDトーク」(Shamrock Records社, 2013)を使用し、大画面モニターに出力したが、研究2年次は全体指導者が話した内容を黒背景に白字で拡大表示するようにした。

3. 評価方法

保健体育科(知的障害)1・2段階の少林寺拳法の指導における評価規準(天海ら, 2023)に従い、本題材全体の評価規準を作成し(表2)、各回の評価、自己評価(毎回授業後に実施)を総括して指導に携わった全教員で一致度を確認し、評価を行った。なお対象生徒は、保健体育科(知的障害)では2段階の目標および内容を学習していたため、少林寺拳法指導プログラムも2段階の目標および内容を踏まえて作成した。

自己評価については、毎時間11項目の全55項目について、「よくできた」「できた」「もうすこし」の3段階で行い、最終授業終了後、生徒に感想を求めた。自己評価の項目は、毎時間共通のものは「自分や周りの人の健康や安全に注意して練習することができたか」「相手を見て、心をこめた合掌礼ができたか」「元気よく挨拶ができたか」「礼儀正しく話を聞いたり練習したりすることができたか」「結手立・合掌礼・座り方・立ち方ができたか」「開足中段構、左前中段構、運歩法、振身、振子突、逆突、蹴上、逆蹴ができたか」「気合いは出せたか」「相手を思いやりながら練習できたか」「自分や相手の課題を見つけ、考えたり工夫したりしたことを伝え合いながら練習できたか」であった。講話についての項目は、「少林寺拳法について、少林寺拳法は人づくりの道(行)であること、武道の意味、本当の強さ、について理解できたか」「拳禪一如、力愛不二の意味が理解できたか」「守主攻従、不殺活人の意味が理解できたか」「剛柔一体、組手主体の意味が理解できたか」であった。他の項目は、基本動作や対人的技能(基本となる技、法形)等に関するもので、「内受突、上膊抜はできたか」「上受蹴はできたか」「上膊捕はできたか」「演武のやり方を理解し、内受突、上膊抜、上受蹴、上膊捕はできたか」「演武で、内受突と上膊抜、上受蹴、上膊捕はできたか」「他の組の演武を見て、良かった点や課題点を伝えることができたか」であった。

表2 少林寺拳法中学部第2学年評価規準

		A (◎): 十分達成 B (○): 達成 C (△): 未達成	
評価の観点	評価規準	評価	
知識・技能	知識	・少林寺拳法の特徴(拳禪一如、力愛不二、守主攻従、不殺活人、剛柔一体、組手主体)について理解できたか。	△
	技能	・礼法・作法、基本動作、内受突、上膊抜、上受蹴、上膊捕ができたか。 ・演武の仕方を理解し、演武の中で相手の動きに応じた対人的技能(内受突、上膊抜、上受蹴、上膊捕)ができたか。	◎
思考・判断・表現	思考・判断	・自分や相手の課題を見つけ、その解決のための活動を考えたり、工夫したりしていたか。 ・演武における自分や相手の課題を見つけ、その解決のための活動を考えたり、工夫したりしていたか。	◎
	表現	・相手と考えたり、工夫したりしたことを伝え合っていたか。	○
主体的に学習に取り組む態度		・礼法・作法に関心をもち、正しい動きをしようとしていたか。	◎
		・内受突、上膊抜、上受蹴、上膊捕に積極的に取り組もうとしていたか。 ・安全に留意し活動していたか。 ・意欲的に教え合い、相手を思いやりながら互いに協力して練習していたか。 ・発表会の作法、演武の流れを理解し、意欲的に発表していたか。	◎

Ⅲ. 結果と考察

1. 対人的技能(法形、技)の選択方法

上受蹴については、上受と蹴りに興味をもち、技の習得に向け意欲的に練習することができた。攻撃や体捌きについては、研究1年次の内受突とはほぼ共通していたため、戸惑うことなく取り組めた様子であった。上膊捕についても、研究1年次の上膊抜と途中まで同様の流れであったため、戸惑うことなく取り組めた様子であった。掴まれた手を抜かずに捕ることに興味をもち、掴まれた相手の手甲を横に向けて肘を曲げていわゆる「コの字形」を作って捕る方法の説明に熱心に耳を傾け練習していた。相手の手を上手く捕ることができると、とても嬉しそうであった。上受蹴も上膊捕も評価は「A (◎): 十分達成」であった。また、回を重ねるごとに大きな声で気合いを出すことができるようになった。

2. ICTの活用方法

軽量で低ノイズの「Roger On」(PHONAK社製, 2022)により, 衣擦れを含む雑音が大幅に低下し, 研究1年次よりクリアに指導者の指示を生徒の補聴器に届けることができ, 生徒からも聞きやすくなったとの評価を得た。道衣への装着は本体に付属しているクリップを使用したが, ボディプロテクター(胴)の装着時やずれを直そうとしたときに落ちそうになったこともあったため, 今後外れないように工夫する必要があった。

「UDトーク」(Shamrock Records社, 2013)の大画面モニター出力では, 黒背景に白字で拡大表示することで, 全体指導者が話した内容を生徒がより確認しやすくなった。また文字変換の精度が向上するために, 説明や指示は, はっきりゆっくり話すことが効果的であった。

3. 評価方法

(1) 生徒の自己評価, 感想

自己評価については, 第1回から第5回までの全55項目で, 評価数は「よくできた」が40項目(72.7%), 「できた」が13項目(23.6%), 「もう少し」が2項目(3.6%)であり, 全体的には「よくできた」の割合が高かった。講話(全4項目)では, 「できた」が3回, 「よくできた」が1回であったことから, 理解度は高くはないことがうかがわれた。「もう少し」と評価された項目は, 「自分や相手の課題を見つけ, 考えたり工夫したりしたことを伝え合いながら練習できたか」であったが, 「もう少し」(第1・2回), 「できた」(第3回), 「よくできた」(第4・5)回と授業が進むごとに自己評価が上昇していた。また「気合いは出せたか」については, 「よくできた」(第1～3回), 「できた」(第4・5回)であったことから, 演武時は技に強く意識が向けられて気合いが出しにくくなることがうかがわれた。

授業終了後の感想については, 「学習発表会で発表した上膊拔が楽しかった」「ボディプロテクター(胴)を蹴ると大きな音が鳴り, 気持ちよかった」「気合いは腹から声を出すことがうまくできず難しかった」という記述があったことから, 発表することや気合いを出すことに積極的に取り組もうとしていること, 突きや蹴りを実際に当てることにより意欲が高まることがうかがえた。また, 「技の動きを覚えてスムーズに演武することができなかつたため, しっかり動作の順番を覚えてもっと早く技が出せるようになりたい」「少林寺拳法について学習して, 自分の身を守ってから攻撃する守主攻従を意識して行動できる人間になりたいと思った」「来年度は, 手首を固める技をやってみよう」という記述があったことから, 武道としての少林寺拳法の教えも意識して技能を高めようとするとともに, 少林寺拳法をもっと学びたいという意欲も高まったことがうかがえた。

(2) 観点別学習状況の評価

評価は授業に携わった教員で一致度を確認しながら, 自己評価も勘案して行われた(表2)。技能(2項目), 思考・判断(2項目), 主体的に学習に取り組む態度(5項目)は「B(○):達成」であったが, 知識「少林寺拳法の特徴(拳禅一如, 力愛不二, 守主攻従, 不殺活人, 剛柔一体, 組手主体)について理解できたか」, 表現「相手と考えたり, 工夫したりしたことを伝え合っていたか」の2項目については「C(△):未達成」であった。

学校の教員からは, 複数の教員で一致度を確認しながら評価を行うことで, より確かな評価が可能となること, 作成した評価規準や指導プログラムは妥当であったとの見解が示された。

(3) 少林寺拳法の授業についての学校の評価

学校からの評価としては, 「2年目の継続した取組であったため不安感もなく, 既習の技を思い出しながら練習に取り組むことができた」こと, 「事前に今年度取り組む技が分かり, 期待感をもって学習にのぞむことができた」ことが挙げられた。また「技の練習中も正しい技を出せるよう評価し合い, 相手とコミュニケーションをとりながら真剣に活動している様子が見られ, 上達に向かって相乗効果を生んでいた」こと, 「指導者や相手からの助言を聞く際の生徒の表情から真剣さが伝わってきた」ことも挙げられた。さらに総括として, 「少林寺拳法は二人一組で攻守を交代して, 攻者と守者のそれぞれの役割を経験しながら互いに上達を目指す武道であり, 自然とやりとりが生まれ, 良かった点や改善点を相互に評価し合いながら練習が進んでいくため, 生徒の社会性向上に効果を期待できる学習活動である」ことが成果として挙げられた。

以上の結果から、中学部保健体育科（知的障害）の武道の指導における少林寺拳法中学部第2学年の指導プログラムとして、表1-1から表1-5を提案する。なお5時間目に使用した組演武採点シートの評価項目は、「合掌礼ができたか」「構えができたか」「相手の突きをかわせたか（上受蹴）」「五指を張り、腕刀で上受ができたか（上受蹴）」「脇を締め上膊と内腕刀で手を挟む守法ができたか（上膊捕）」「掴んできた相手の手首を生かして挟み、手をしっかりつけて、やや押し返すように捕ることができたか（上膊捕）」「反撃の蹴りは届いたか」「気合いが出せたか」「相手から視線が外れていないか」「技が終わった後の心構えと身体の備えができたか」であった。

IV. おわりに

对人的技能（法形、技）の選択については、生徒の興味・関心に基づき、技の系統性を吟味して扱うことで意欲を引き出すことができると考えられた。また自己評価から、守者はボディプロテクター（胴）などを装着し、実際に突きや蹴りを当てることで意欲が高まると考えられた。

ICTの活用については、「Roger On」（PHONAK社製、2022）を指導者の襟に装着することで、衣擦れを含む雑音を最小限にして、クリアに指導者の指示を生徒の補聴器に届けたり、指導者もマイクの重量感を感じずに、模範を示したりすることができると考えられた。しかし落下する危険性があるため、本体付属のクリップの他、さらに落下しないようにする工夫が必要と考えられた。また学校からは、事前に渡していた对人的技能の動画や学校が撮影していた授業の動画を事前に興味をもって視聴していたとの報告があり、対象生徒にとって動画は对人的技能のイメージをもつことができる有用なツールであると考えられた。

評価方法については、複数の教員で一致度を確保するとともに、自己評価も活用することで精度が高まると考えられた。一方、知識（少林寺拳法の特徴）については、授業ではプリントの説明のみであったことから、理解を促す指導法の工夫および、簡単な確認テストを実施するなど、指導法や評価方法の検討が必要と考えられた。また、表現（相手と考えたり工夫したりしたことを伝え合う）については、ポイントや演武採点シートの観点を絞り、伝え合う時間を十分にとって授業を展開する必要があると考えられた。

今後は引き続き本研究を継続し、中学部第3学年の少林寺拳法指導プログラムを開発するとともに、知識の評価を確実に実施するための方法、特に技能面における生徒の認知特性に応じた指導方法について検討していきたい。

倫理的配慮

本研究は、弘前大学教育学部研究倫理委員会の承認を得て実施され、対象生徒および保護者に対し事前に説明を行い、研究発表や出版物への発表・掲載について文書による承諾を得るとともに、所属長からも同様の承諾を得た。また、本研究に当たって開示すべき利益相反関係はない。

付記

本研究は、日本特殊教育学会第61回大会（2023横浜大会）においてポスター発表を行った。

文献

天海丈久・保村崇有・工藤知哉・根深諒太・加福千佳子・池田香織・秋元宏介（2023）知的障害者である生徒に対する教育を行う特別支援学校中学部保健体育科の武道における少林寺拳法指導プログラムの開発－特別支援学校（聴覚障害）における実践を通して－. 弘前大学教育学部研究紀要クロスロード, 27, 43-52.

文部科学省（2018）特別支援学校幼稚部教育要領 特別支援学校小学部・中学部学習指導要領. 海文堂.

日本武道協議会・一般財団法人少林寺拳法連盟（2017）日本武道協議会設立40周年記念「中学校武道必修化指導書 少林寺拳法」. 三友社, 29.

PHONAK（2016）：Roger Touchscreen Mic. PHONAK社製.

PHONAK（2022）：Roger On. PHONAK社製.

Shamrock Records（2013）：UDトーク. Shamrock Records社.